Bulletin of Kansai University of Nursing and Health Sciences. Vol. 8, No. 1, pp.44-50, 2016

研究報告

看護学生の情動知能の発達（2）
――3年次における性格特性・Self-Esteemとの関連――

Development of Emotional Intelligence in Nursing Students（2）:
Relationships with personality Traits and Self-esteem among Third-year students

野村光江[1)]　小出水寿英[2)]　菅佐和子[3)]
1）関西看護医療大学　看護学部　一般教養
2）関西看護医療大学　看護学部　精神看護学領域
3）京都橘大学　健康科学部　心理学科

Mitsue Nomura[1)], Toshihide Koizumi[2)], Sawako Suga[3)]
1）Kansai University of Nursing and Health Sciences, Liberal Arts
2）Kansai University of Nursing and Health Sciences, Mental health and Psychiatric Nursing
3）Kyoto Tachibana University, Faculty of Health Sciences, Department of Psychology

要旨

本研究は，看護学生のコミュニケーション能力育成に向けた基礎的資料を得ることを目的とし，情動知能と性格特性・Self-Esteem との関連について検討した。4 年制看護大学の 3 年次の学生を対象に，EQS（内山ら，2001）および日本語版 TIPI-J（小塩ら，2012），R 式 SE 尺度（菅，1980）を実施した。その結果，情動知能と性格特性との相関については，情動知能と外向性・勤勉性・開放性とが中程度の正の相関を示し，情動知能と神経症傾向は無相関または弱い負の相関を示した。EQS の対人対応領域では協調性と中程度の正の相関を示した。さらに，同じ学生の 1・2 年次の性格特性や Self-Esteem の程度（野村ら，2015；小出水ら，2015）が 3 年次の情動知能を予測するか重回帰分析により検討した結果，EQS の 3 領域いずれにおいても，性格特性・Self-Esteem のうち開放性が重要な予測因であることが明らかになった。自己対応領域・状況対応領域では勤勉性，対人対応領域では協調性も正の方向に予測した。教育への示唆や今後の課題について考察を行った。

キーワード：看護学生，情動知能，性格，Self-Esteem
Keywords：nursing students，emotional intelligence，personality traits，self-esteem

問題

看護師免許取得前の基礎教育において，コミュニケーション能力，対人関係能力の育成につながるような教育を強化すべきであると提言されている（厚労省 , 2011; 文科省 , 2004; 文科省 , 2011）。患者，家族，医療従事者等と円滑なコミュニケーションを図り良好な対人関係を構築するうえでは，自己と他者の感情をよく理解し，状況に応じて適切に対応する能力が不可欠である。こうした能力は情動知能（Emotional Intelligence; Salovey & Mayer, 1990）と呼ばれ，特性としての側面と能力としての側面があることが明らかにされている（Petrides & Furnham, 2000）。看護学生の情動知能の発達の様相を明らかにすることは，看護基礎教育を考えるうえで重要な研究課題である。

先行研究は，看護学生の情動知能が必ずしも学年進行とともに直線的に向上するわけではないこと，情動知能の発達には個人差が見られることを示している。たとえば宇津木ら（2013）では，情動知能を EQS（内山ら，2001）を用いて測定し，1 年次から 2 年次にかけて愛他心が低下したことを報告している。また，1 年次の情動知能得点が高かった学生では学年進行とともに得点が低下し，1 年次に得点の低かった学生は，2・4 年次に得点が上がる傾向が示唆されている。野村ら（2015）は宇津木らと同様に EQS を使用し，1 年次から 2 年次にかけて，情動知能得点が上昇する学生と低下する学生の両方が存在することを示している。情動知能の発達過程をより正確に理解するためには，上記のような個人差に関連する要因を明らかにする必要がある。

筆者らは看護学生の情動知能の発達を縦断的に調査しつつ，情動知能の発達を左右する要因として性格特性と Self-Esteem に着目し，関連を検討している（小出水ら，2015；野村ら，2015）。現在までのところ情動知能と性格特性・Self-Esteem との関係は，学生の性別および調査年次によって異なることが報告されている。情動知能と性格特性の関連を検討した研究は，看護系とそれ以外の大学生，一般社会人など多様な調査対象に対して行われているが，一時点での相関を検討することが多く（内山ら，2001；豊田ら，2005；大野木，2004；大野木，2005），二時点以上で縦断的に性格特性の予測性を検討した例は見当たらない。そこで本研究は 1・2 年次の性格特性と Self-Esteem の程度が 3 年次の情動知能を予測するか検討することを目的とした。性格特性が種々の対人関係や社会適応を予測する（Ozer& Benet-Martinez, 2006）ことを考慮すれば，看護学生の情動知能に性格特性や Self-Esteem が予測力を持つことは大いにありそうに思われる。

方法

参加者 野村ら（2015），小出水ら（2015）と同一の看護学生を対象とした。3 年次のデータとして 78 名（女子 54 名，男子 24 名）からデータを収集し，各自が作成した 1・2 年次と同一の ID を用いて 1・2 年次のデータと照合した。1-3 年次のデータのいずれも欠損がなく，EQS の回答信頼性基準にも該当しなかった 51 名（女子 37 名，男子 14 名）のデータを分析対象とした。

材料 以下の 3 種類の自記式質問紙を使用し，それぞれの検査マニュアルに従って採点し得点化した。まず，EQS（Emotional Intelligence Scale; 内山ら , 2001）は自己対応，対人対応，状況対応の 3 領域全 65 項目に「まったくあてはまらない（0 点）」から「非常によくあてはまる（4 点）」までの 5 段階で回答する尺度であり，得点範囲は 3 領域いずれも 0-84 点であった。自己対応領域の下位尺度には，「自己洞察」「自己動機づけ」「自己コントロール」, 対人対応領域の下位尺度には「共感性」「愛他心」「対人コントロール」，状況対応領域の下位尺度には「状況洞察」「リーダーシップ」「状況コントロール」がそれぞれ含まれていた。次に TIPI-J（日本語版 Ten Item Personality Inventory; 小塩ら , 2012）は, 10 項目で構成され, Big Five の 5 次元（外向性，協調性，勤勉性，神経症傾向，開放性）について「全く違うと思う（1 点）」から「強くそう思う（7 点）」までの 7 件法で測定する尺度であった（得点範囲：2-14 点）。最後に，Self-Esteem の測定として R 式 SE 尺度（菅, 1980）を使用した。これは Rosenberg（1965）に採点法等の改訂を加えて開発され，10 項目の質問に 4 件法で回答する。得点範囲は 10-40 点であった。

手続き　3年次の5-6月に授業時間を利用して11-17名の小集団形式で実施した。1回あたりの所要時間は20分程度であった。

倫理的配慮　本研究は関西看護医療大学倫理審査委員会の承認を得て実施された。研究協力者に対しては，研究の目的や方法，自由意思に基づく参加であること，成績に関係しないこと，途中辞退が可能であること，研究協力の可否による不利益がないこと，プライバシーは保持されること，データは研究以外の目的では使用しないこと等の説明を書面と口頭で行い，同意を得た。

分析　統計処理には統計ソフトウェアR version3.2.1を使用した。尺度間の相関にはPearsonの積率相関係数を用いた。1・2年次のTIPI-J・Self-Esteemと3年次のEQSとの関連の検討には重回帰分析（ステップワイズ法）を使用した。いずれも有意水準をp =.05とした。

結果

3年次のEQS・TIPI-J下位尺度得点・R式SE尺度の平均値と標準偏差，および尺度間の相関を表1に示す。3年次における情動知能と性格特性との相関については，EQSと外向性・勤勉性・開放性とが中程度の正の相関を示し，EQSと神経症傾向は無相関または弱い負の相関を示した。EQSの対人対応領域では協調性と中程度の正の相関を示した。

3年次の情動知能と1・2年次の性格特性やSelf-Esteemとの関連を明らかにするため、1・2年次のTIPI-J得点･R式SE尺度の得点（野村ら，2015；小出水ら，2015）と，3年次のEQS下位尺度の得点の相関を検討した（表2）。さらに，3年次のEQS下位尺度得点を目的変数，1年次・2年次のTIPI-J得点・R式SE尺度得点を目的変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った（表3）。その結果，EQSの3領域いずれにおいても2年次の開放性が重要な予測因であることが明らかになった。自己対応領域・状況対応領域では勤勉性，対人対応領域では協調性も正の方向に予測した。

表1．3年次の情動知能・性格特性・Self-Esteem（N =51）

		M	*SD*	*r*																
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
EQS																				
1	自己対応領域	44.31	13.53	—																
2	a. 自己洞察	13.20	4.49	.88**	—															
3	b. 自己動機づけ	13.59	4.55	.89**	.70**	—														
4	c. 自己コントロール	17.53	5.96	.92**	.71**	.73**	—													
5	対人対応領域	51.65	12.11	.66**	.57**	.65**	.56**	—												
6	d. 共感性	17.29	3.75	.45**	.41**	.52**	.31**	.83**	—											
7	e. 愛他心	16.61	3.82	.48**	.34**	.52**	.44**	.89**	.66**	—										
8	f. 対人コントロール	17.75	6.03	.74**	.67**	.66**	.66**	.93**	.63**	.74**	—									
9	状況対応領域	40.20	14.21	.88**	.82**	.77**	.80**	.71**	.49**	.51**	.80**	—								
10	g. 状況洞察	18.24	5.54	.80**	.70**	.70**	.76**	.73**	.56**	.56**	.75**	.91**	—							
11	h. リーダーシップ	9.82	5.18	.78**	.75**	.63**	.74**	.54**	.30**	.33**	.68**	.92**	.75**	—						
12	i. 状況コントロール	12.14	4.83	.84**	.80**	.78**	.70**	.68**	.48**	.48**	.76**	.91**	.74**	.77**	—					
TIPI-J																				
13	外向性	8.14	3.21	.54**	.55**	.52**	.40**	.48**	.33	.27	.58**	.56**	.38**	.51**	.66**	—				
14	協調性	9.94	2.02	.23	.24	.28	.14	.46**	.49	.43**	.34**	.27	.31**	.13	.29**	.11	—			
15	勤勉性	6.84	2.55	.44**	.44**	.38**	.36**	.31**	.12	.22	.41**	.37**	.26	.40**	.35**	.49**	.09	—		
16	神経症傾向	9.61	1.94	-.25	-.23	-.18	-.25	-.15	-.01	-.03	-.28	-.26	-.21	-.19	-.33**	-.41**	-.21	-.22	—	
17	開放性	8.18	2.33	.42**	.46**	.45**	.26	.51**	.43	.40**	.50**	.47**	.43**	.44**	.43**	.42**	.39**	.32**	-.19	—
Self-Esteem																				
18	Self-Esteem	23.22	4.83	.48**	.47**	.41**	.43**	.23	.15	.08	.32**	.49**	.45**	.44**	.47**	.37**	.36**	.26	-.48**	.36**

+p < .10, *p < .05, **p < .01

表 2. 1・2 年次の性格特性・Self-Esteem と 3 年次の情動知能との相関（N =51）

		自己対応領域	a. 自己洞察	b. 自己動機づけ	c. 自己コントロール	対人対応領域	d. 共感性	e. 愛他心	f. 対人コントロール	状況対応領域	g. 状況洞察	h. リーダーシップ	i. 状況コントロール
外向性	1年次	.36 *	.39 *	.32 *	.27 +	.27 +	.13	.11	.39 **	.36 *	.19	.37 *	.45 **
	2年次	.37 *	.37 *	.42 **	.24 +	.33 *	.24	.16	.41 **	.38 *	.17	.39 **	.52 **
協調性	1年次	.03	.05	.04	.00	.22	.21	.27 +	.13	.02	.12	−.12	.04
	2年次	.05	.07	.01	.05	.33 *	.30 *	.39 **	.23	.08	.19	−.01	.01
勤勉性	1年次	.35 *	.40 **	.23	.32 *	.23	−.02	.20	.34 *	.37 *	.32 *	.38 *	.30 *
	2年次	.41 **	.43 **	.25 +	.41 **	.20	.02	.17	.29 *	.33 *	.25 +	.39 **	.27 +
神経症傾向	1年次	−.19	−.14	−.24 +	−.15	−.07	−.07	.03	−.12	−.19	−.16	−.13	−.22
	2年次	−.28 +	−.20	−.21	−.32 *	−.11	.03	−.01	−.24 +	−.20	−.16	−.16	−.21
開放性	1年次	.51 **	.51 **	.53 **	.36 *	.41 **	.36 *	.34 *	.38 *	.43 **	.43 **	.33 *	.41 **
	2年次	.60 **	.57 **	.60 **	.47 **	.51 **	.40 **	.37 *	.54 **	.57 **	.54 **	.57 **	.46 **
Self-Esteem	1年次	.27 +	.27 +	.22	.24 +	.07	−.07	−.03	.20	.32 *	.25 +	.35 *	.27 +
	2年次	.27 +	.23	.32 *	.18	.07	−.04	.03	.14	.25 +	.22	.21	.28 +

$+p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$

表 3. 重回帰分析の結果（N =51）

		自己対応領域	a. 自己洞察	b. 自己動機づけ	c. 自己コントロール	対人対応領域	d. 共感性	e. 愛他心	f. 対人コントロール	状況対応領域	g. 状況洞察	h. リーダーシップ	i. 状況コントロール
外向性	1年次	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2年次	—	—	$\beta=.26^{*}$	—	—	—	—	—	—	—	—	$\beta=.41^{**}$
協調性	1年次	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	$\beta=-.23^{*}$	—
	2年次	—	—	—	—	$\beta=.25^{*}$	—	$\beta=.39^{**}$	—	—	—	—	—
勤勉性	1年次	$\beta=.28^{*}$	$\beta=.34^{**}$	—	—	—	—	—	$\beta=.27^{*}$	$\beta=.30^{*}$	$\beta=.25^{*}$	$\beta=.37^{**}$	—
	2年次	—	—	—	$\beta=.31^{*}$	—	—	—	—	—	—	—	—
神経症傾向	1年次	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2年次	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
開放性	1年次	—	—	—	—	—	—	$\beta=.34^{**}$	—	—	—	—	—
	2年次	$\beta=.56^{**}$	$\beta=.53^{**}$	$\beta=.52^{**}$	$\beta=.39^{**}$	$\beta=.46^{**}$	$\beta=.52^{**}$	—	$\beta=.50^{**}$	$\beta=.53^{**}$	$\beta=.50^{**}$	$\beta=.53^{**}$	$\beta=.33^{**}$
Self-Esteem	1年次	—	—	—	—	—	$\beta=-.28^{*}$	—	—	—	—	—	—
	2年次	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
性別（女=1, 男=0）		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		$F(2,48)=18.47^{**}$	$F(2,48)=18.42^{**}$	$F(2,48)=17.26^{**}$	$F(2,48)=10.85^{**}$	$F(2,48)=11.15^{**}$	$F(2,48)=7.03^{**}$	$F(2,48)=8.84^{**}$	$F(2,48)=13.54^{**}$	$F(2,48)=17.07^{**}$	$F(2,48)=12.86^{**}$	$F(3,47)=14.05^{**}$	$F(2,48)=13.70^{**}$
		$R^{*2}=.41$	$R^{*2}=.41$	$R^{*2}=.39$	$R^{*2}=.28$	$R^{*2}=.29$	$R^{*2}=.19$	$R^{*2}=.24$	$R^{*2}=.33$	$R^{*2}=.39$	$R^{*2}=.32$	$R^{*2}=.44$	$R^{*2}=.34$

$*p<.05$, $**p<.01$

考察

本研究は，小出水ら（2015）, 野村ら（2015）を発展させ看護学生の情動知能の発達について検討した。はじめに，情動知能については野村ら（2015）が１年次から２年次の間に愛他心の低下が見られることを示したが，本研究の３年次の得点はやや上昇の傾向を示唆した。本研究の調査対象となった学生が今後の臨地実習を経験し，どのように情動知能を発達させるのか期待される。小出水ら（2015）は，１年次の Self-Esteem の得点が菅ら（1996）よりも低かったと報告しているが，本研究の結果からは，３年次での Self-Esteem の得点が菅らの３年次の得点と大きく異なるとは判断し難いことが読み取れた。学年進行に伴う看護学生の Self-Esteem の変容の過程について明らかにすることは今後の課題の一つと言える。

次に，３年次における情動知能と性格特性との相関については，外向性や開放性，勤勉性と正の相関を示した。豊田ら（2005）は J-ESCQ によって測定された情動知能が，外向性と開放性との間に正の相関，神経症傾向との間に負の相関を示すことを明らかにしており，本研究の結果と整合性が高い。

さらに，３年次の情動知能と，１・２年次の性格特性および Self-Esteem との関連については，開放性がもっとも重要な予測因であることが示唆された。開放性は，拡散的思考との関連が指摘されている（Nettle, 2007）。情動知能が必要となる場面では，最適な解が一つに定まる場合よりも，柔軟に複数の解を考え出す方が有益な場合が多いと考えられることから，開放性が高い方が情動知能が向上するという正の方向の予測が成り立つことは妥当性が高い。本研究の結果から，教育場面において開放性に関連する拡散的思考を促すことによって，結果的に情動知能の発達を促す可能性が示唆される。情動知能を客観的に評価するのは、思考力を客観的に評価するよりも困難と考えられるため，適切な学生支援を行ううえでは情動知能自体を向上させるような教育を試みるよりも，情動知能と関連する性格特性に変容を働きかける方略が有益かもしれない。

興味深い結果として，EQS 下位尺度の１つである共感性に対しては，開放性が正の予測をする以外に，Self-Esteem が負の方向に予測することが示された。この理由としては, 小出水ら（2015）で考察したように Self-Esteem が低いからこそ共感性の高さに結びつくという可能性が考えられる。しかしながら，共感性と Self-Esteem の単相関はほぼ無相関といってよい状態にあったことから，この場合の Self-Esteem は抑制変数として機能している可能性も考えられる。すなわち，開放性と Self-Esteem に相関があり，開放性の得点が同程度であれば，Self-Esteem が低い方が Self-Esteem によって説明されない開放性独自の成分と共感性の関連の程度がより強いと推測できる。ただし共感性についての自由度調整済 R^2 は，ほかの尺度に比べて高くなかったことから，共感性を説明する要因について丁寧に検討していく必要があるだろう。性格特性は安定しながらも発達の過程で変化する（川本ら，2015; Roberts et al., 2006）。大学生の情動知能と性格特性との関連についても，確固としたものがあることを想定するよりは，動的な影響過程を想定する方が，情動知能の発達の軌跡を正確に推定するうえでは適切なのかもしれない。

最後に今後の課題を述べたい。本研究の方法上の問題として，本研究では授業時間中にデータ収集を行ったことが挙げられる。研究参加は各学生の自由意思によるものであり，データ収集に利用した授業の出席確認は研究参加とは別に行っていたため大きな問題はなかったと考えている。しかしながら，授業時間を利用することによって，そうでない場合よりも強制力がかかりやすい状況であったことは否定できず，研究の限界と言える。また，情動知能が本来対人関係の中で育成される性質を持つことから，本研究の結果には，対象となった学生が１年次から３年次までの間に経験した学生間の相互作用の影響が含まれていることも注意を要する。したがって，今後は他の看護大学の学生を対象にしたデータや，より大規模なサンプルで再検討することが必要と考えられる。さらに，看護学生の情動知能の特性を明確化させるうえでは，看護学生とそのほかの大学生等の比較を行うことも今後の課題として挙げられる。

文献

Beauvais, A. M., Brady, N., O'Shea, E. R., & Griffin, M. T. Q.（2011）：Emotional intelligence and nursing performance among nursing students. Nurse Education Today, 31（4）, pp.396-401.

Fernandez, R., Salamonson, Y., & Griffiths, R.（2012）：Emotional intelligence as a predictor of academic performance in first - year accelerated graduate entry nursing students. Journal of Clinical Nursing, 21（23-24）, pp.3485-3492.

川本哲也，小塩真司，阿部晋吾，坪田祐基，平島太郎・伊藤大幸・谷伊織（2015）：ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差：大規模横断調査による検討．発達心理学研究，26（2），pp.107-122.

小出水寿英, 野村光江, 西垣里志, 菅佐和子（2015）: 看護学生の感情機能（情動知能）に関する縦断的研究（１）―ベースラインにおける情動知能と Self-Esteem の関連性―．関西看護医療大学紀要 , 7, pp.27-35.

厚生労働省（2011）：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書．http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbiu.pdf（情報取得 2015.11.09）

文部科学省（2004）：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標（看護学教育の在り方に関する検討会報告）．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm（情報取得 2015.11.09）

文部科学省（2011）：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf（情報取得 2015.11.09）

Nettle, D.（2007）：Personality: What makes you the way you are. Oxford: Oxford University Press.（ネトル，D. 竹内和世訳（2009）：パーソナリティを科学する　白揚社 279p）

野村光江 , 小出水寿英, 西垣里志, 菅佐和子（2015）: 看護学生の情動知能の発達―性格特性との関連―．関西看護医療大学紀要 , 7, pp.36-44.

大野木裕明（2004）：情動知能指数（EQS）と自我態度スケール（EAS）および短縮版ネオ人格目録改訂版（NEO-FFI）間の相関的関連性．福井大学教育地域科学部紀要．第 IV 部，教育科学 , 60, pp.1-8.

大野木裕明（2005）：EQS（情動知能指数）と FFPQ（5 因子性格検査）間の相関的研究．福井大学教育地域科学部紀要．第 IV 部，教育科学 , 61, pp.17-26.

小塩真司，阿部晋吾，カトローニ・ピノ（2012）：日本語版 Ten Item Personality Inventory（TIPI-J）作成の試み．パーソナリティ研究 , 21, pp.40-52.

Ozer, D. J., & Benet-Martínez, V.（2006）：Personality and the prediction of consequential outcomes. Annual Review of Psychology, 57, pp.401-421.

Petrides, K. V., & Furnham, A.（2000）：On the dimensional structure of emotional intelligence. Personality and Individual Differences, 29, pp.313-320.

Por, J., Barriball, L., Fitzpatrick, J., & Roberts, J.（2011）：Emotional intelligence: Its relationship to stress, coping, well-being and professional performance in nursing students. Nurse Education Today, 31, pp.855-860.

Roberts, B.W., Walton, K.E., & Viechtbauer, W.（2006）: Patterns of mean-level change in personality traits across the life course: a meta-analysis of longitudinal studies. Psychological Bulletin, 132, pp.1-25.

Rosenberg, M.（1965）: Society and the Adolescent Self-image, p.326. Princeton University Press, New Jersey.

Salovey, P., & Mayer, J.D.（1990）：Emotional intelligence. Imagination, Cognition, and Personality, 9, pp.185-211.

菅佐和子 , 任和子 , 池本正生 , 浅川康吉 , 山根寛 .（1996）：医療技術短期大学部学生のパーソナリティと教育に関する研究 ②―質問紙法性格検査を用いて―. 京都大学医療技術短期大学部紀要 . 別冊 , 健康人間学 , 8, pp.40-47.

豊田弘司，森田泰介，金敷大之，& 清水益治（2005）：日本版 ESCQ（Emotional Skills &

Competence Questionnaire）の開発 . 奈良教育大学紀要 . 人文・社会科学 , 54, pp.43-47.
内山喜久雄，島井哲志，宇津木成介，大竹恵子（2001）:EQS マニュアル．実務教育出版，東京．64p
宇津木成介，島井哲志，橋本由里，菅佐和子（2013）：看護学生の感情知能に関する縦断的研究．ヒューマン・ケア研究，13（2），pp.89-100.